慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	漱石『文学論』成立過程の一側面：中川芳太郎筆草稿「第五編 集合Fの差異」を視座として
Sub Title	
Author	服部, 徹也(Hattori, Tetsuya)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2015
Jtitle	三田國文 No.60 (2015. 12) ,p.86- 102
JaLC DOI	10.14991/002.20151200-0086
Abstract	
Notes	挿表
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20151200-0086

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

漱石『文学論』成立過程の一側面

――中川芳太郎筆草稿「第五編　集合Fの差異」を視座として――

服部　徹也

はじめに

明治三十五年十月十日頃、藤代禎輔は文部省から岡倉由三郎を通じて電報を受けとる。藤代に下された命は、留学生夏目金之助を保護して帰朝することであった。〈夏目狂せり〉との噂が留学生の間で広まり、文部省の耳にも届いたのだと推定されている。[1] こうした漱石の留学エピソードをめぐる関心にひきかえ、書物としての『文学論』の成立過程については十分に議論されてこなかった。無論、全ての資料が理想的な形で揃うことが望めない以上、その経緯についてはいくつかの〈ミッシング・リンク〉というべきものが残ることは確かである。しかしそのことは現存する資料を無視してよい理由にはならない。『文学論』読解の論文は近年増加傾向にあるが、いくつかの重要な資料が新たに公開されたにも拘わらず、〈他筆による関連資料〉への無関心はいまだ克服されていないように思われる。

本稿は県立神奈川近代文学館が所蔵する中川芳太郎筆草稿「第五編　集合Fの差異」を手がかりに、漱石『文学論』の成立過程について基礎的な考証を行うものである（以下「中川草稿」と呼ぶ）。なお、同じく県立神奈川近代文学館所蔵資料に、漱石による帝大講義を中川が筆記した「受講ノート」も現存している（以下「中川ノート」と呼ぶ。「中川ノート」も参考とするが、本稿は主に『文学論』後半部の加筆にまつわる事情に焦点化するため、「中川ノート」そのものについての詳述は別稿に譲ることとする）。

一　『文学論』の成立過程における　ミッシング・リンク

中川芳太郎について、同級の森田草平は「三高〔現在の京大吉田南キャンパス〕からは中川芳太郎といって、すばらしい秀才が英文科へ入ってきた。それは高等学校を三年間首席で通したばかりでなく、沙翁のごときは、その間に全部読破してしまったという評判である」という。漱石は中川を目に掛け、卒業論文を激賞した。そうした信頼もあり『文学論』刊行に携わった中川であったが、森田によればそれ以後「同君は先生の御機嫌を損じて、すっかり恐縮してしまったらしい。その後木曜会にもあまり顔を出さなくなり――もっとも、『虞美人草』を書

くために先生のほうで一時木曜の面会日を閉鎖されたこともあったように思うが――さらに九月先生が早稲田南町へ転居されてからは、ほとんど同君の顔を見なくなってしまった。（略）私は中川君の失敗を気に病むのはいいが、気に病みすぎて、だんだん先生から離れていったことを返す返す惜しいことだと思っている。そして、本当にお気の毒だと思っている次第である」という。[2] 伝記が目的でないから、これ以上は深入りしない。

「中川草稿」は漱石の孫の夏目房之介氏により実家から発見されたもので、『文学論』第五編の草稿にあたり、漱石の全面的な書き直しによって不用となったものが、破棄されずに残っていたという。平成十六年五月十七日に貴重な資料の発見として報道されて以来、研究に活かされてはこなかった。三四字×三〇行の原稿用紙（外寸三〇六×二三〇㎜）に縦書きで二十六枚にわたり、漱石による書き入れはない。一行目に「第五編集合Fの差異」とあり最終頁が「此編を閉づ」と終ること、漱石の書き下ろした部分も含めた『文学論』原稿（県立神奈川近代文学館蔵）全体と用紙が同じであることから、出版に際して書かれたもので間違いない。なお「中川ノート」の方は原稿用紙でなく洋罫紙に横書きである。

「中川草稿」が不用となるに至った経緯を考証する前に、ひとまず書簡類によって時系列を確認しておく。書肆の求めを受け、中川芳太郎に助力を頼んだ日時は詳らかでないが、明治三十九年五月十九日中川宛書簡に「御願の文学論はいそぐ必要なし。面倒ならばやめてもよし。僕は是非出版したい希望もない。通読の際変なことあらば御注意を乞ふ」とある。八月五日中川宛書簡には「おとつさんが御病気で血を吐かれたさうな嘸御心配の事であろ」云々とあるきりで、『文学論』について言及があるのは同年十月十九日野間真綱宛書簡で「今少しすると文学論が出来る」とあるのを待たねばならない。同月二十九日薄井秀一宛書簡に「小生近刊の文学論に序を認め候」といい、十一月四日の『読売新聞』日曜付録に「文学論序」が掲載される。「文学論の序は文章を見てもらふのでも何でもない。あの通りの事を読んでヘエーと云つてもらへばいゝ。読売へのせる必要もなかつた。何かくれといふからやつた」とは同月六日森田草平宛書簡での言だ。同月十一日高浜虚子宛書簡では、「今日は早朝から文学論の原稿を見てゐます中川といふ人に依頼した処先生頗る名文をかくものだから少々降参をして愚痴たらぐ読んでいます。今四十枚ばかり見た所」と初めて中川芳太郎の文体に言及する。この時期のことを野間真綱が昭和三年十一月に回想した「文学論前後」には「中川氏が骨を折つてあの講義を整理して来られたとき『中川の文は荘重で文学論には持つて来いの文体だよ』といかにも機嫌がよかった」[3]とあるが、記憶の中で反語のニュアンスが抜け落ちたとも疑われる。明治三十九年十一月二十九日片上伸宛書簡では「ホトヽギスの方も漸の事で十二月二十日〔迄〕待つて貰ひました。夫から学校の試験をして文学論の校正をして大晦日迄働く積りであります」という。十二月十九日中川宛書簡で「文学論の校正が舞ひ込んで来た是は君の所へ行くのを間違つて僕の所へ来たのだらう」とあり、組み上がった版から校正刷りにかけていたのだろう。年が

あけて明治四十年二月十六日松根東洋城宛書簡に「僕は文学論で困却の体である」、同月二十一日坂本雪鳥宛書簡に「只今あるる仕事に追はれ其方を一日も早く片づけねばならぬ」といい、三月二十八日に京都旅行に発つまでに終えたものと思われる。刊行経緯について述べた中川芳太郎による「序」の末尾には明治四十年三月と記載されている。中川の序文を引いておく（『漱石全集』十四巻、第二次刊行、岩波書店、平成十五年より引用。以下、同書を「刊本」と呼ぶ。引用文中傍線は以下すべて引用者による）。

始め此著は昨年内を限りとして出版の予定なりしも幾多の事情のため其期を過ぐること三月にして今漸くこれを公にするを得たり。遅延の主因としては左のことあり。

原稿整理の嘱をうけし余に日々の業務ありて時間の全部を以て、これに当る能はざりしこと、

原稿は整理の成るに随つて先生の校閲を乞ひしも、改訂を要する節頗る夥しく殊に最後の一篇の如き全部先生の起稿を煩すに至り而して此間先生は創作に忙はしくして、これに用ゆべき日子の極めて得難かりしこと、

これを印刷に附するに方りても原稿の全部を挙げて托すること能はざりしを以て勢ひ其進捗遅々として督促其効を致さゞりしこと。

（略）最初一二篇は字句の修正にのみ限られしも、中頃、整理の際省略に過ぎ論旨の貫徹を欠く節多かりしを以て、先生の筆を添ふること漸く密に、遂に第四篇の終り二章及び第五篇の全部に至りては悉く先生により稿を新にせざるべからざりしなり。（略）全部の訂正を終り、先生更に遡つて、初めに簡なりし部分を改むるの意ありしと雖も、参考すべき前半は既に印刷を了へたるものなりしを以て、また如何ともなす能はざりしなり。

この中川の「序」によれば、なんらかの資料をもとに作った原稿を「整理の成るに随つて」漱石に渡していって、初めはそれで許されていたが、やがて「省略に過ぎ論旨の貫徹を欠く節多かりし」ために漱石が新稿を書き下ろし、後から思い直していままで「字句の修正」に止めていた前半部分にも加筆する希望を持ったということだ。

では、何をもとに中川は浄書原稿を書いていたのか。素朴にこう問うてもよい。もし秩序立って文章化された〈講義用読み上げ原稿〉のようなものを渡されて、それをもとに中川が浄書をしていたとするならば、果たして師の不興を買うまでに内容を刈り込むことを敢えてするであろうか。

この疑問に立ち入るに際し、『文学論』関連資料を大別すれば次の通りである。

（一）漱石旧蔵書、蔵書書き込み、図書購読ノート（「ギディングス・ノート」など）

（二）「文学論ノート」と呼ばれる草稿群

（三）帝国大学受講生による受講ノート（「中川ノート」含む）

（四―一）中川芳太郎による浄書原稿（漱石による修正を受け、出版に使用された部分）

（四―二）　中川芳太郎による浄書原稿（破棄？　第四編第七章の途中から第八章末まで）
（四―三）　中川芳太郎による浄書原稿（不使用。中川筆草稿「第五編　集合Fの差異」）
（五）　漱石による書下ろし部分原稿（四―一と足して一巻となる）
（六―一）『文学論』初版：明治四十年五月七日、大倉書店（誤字多く、正誤表作る）
（六―二）『文学論』再版：明治四十年六月二十日、同（多くを訂正）
（六―三）『文学論』縮刷：大正六年六月三日、同（没後出版だが一部変更あり）

右の便宜上の大別において、ミッシング・リンクとなってしまうのは主に（二）と（三）の間である。すなわち、漱石自筆による〈読み上げ用原稿〉が存在したかどうか、それを参照して（四）中川芳太郎浄書稿が書かれ、さらに（五）書き下ろしの際にも参照されたかどうか、ということが判らないことを意味する。

『文学評論』出版の原稿の整理を担った森田草平は次のように回想している。

今度の仕事は『文学論』と違い、先生の草稿そのものがりっぱな文章になっていたから、私達のやる仕事としては、ただ横のものを縦に書き直すだけであった。というのは、先生は講義の草稿を作るのに、いつも蝿頭の文字で横書きにされる。仕事に脂が乗って、熱心になられればなられるほど、文字が小さくなってくる。少し大袈裟に言えば、しまいには虫眼鏡でも用いなければ見えないほど小さくなるのである。それを縦にして普通の文字に書き直すだけ（略）原語が遠慮なく使ってあるのを、書き直しながら日本語に翻訳していくのと、もう一つ、ところどころに引用してあるポープならポープ、スウィフトならスウィフトの本文（テキスト）を翻訳しておくことである。その他はいっさい手をつけてくれるなという先生の命令であった。これはしかしながら中川君の『文学論』に懲りられたからには相違ないが、校正まで自分でしようと言われたのは、まったくすまない気がした。（略）のちに先生の手を入れられた原稿を見せてもらったが、やはり中川君の原稿同様真っ赤になっていたことを覚えている。[4]

『文学評論』にあたる「十八世紀英文学」講義のために〈読み上げ用原稿〉が作成されていたのは書簡からも窺える。実際明治三十八年九月十六日中川芳太郎宛書簡で「泥棒が講義の草稿を持つて行つたら僕は辞職する訳だが」と冗談をいい、同年十二月六日野間真綱宛書簡でも「草稿をかくのでいそがしい」、明治三十九年八月頃の書簡には講義が書けていない苦しみが度々見える。では、『文学論』にあたる講義ではどうだったのだろうか。そしてそれは中川芳太郎による浄書に用いられたのだろうか。

この空隙をめぐっては、いくつかの相矛盾する記述が与えられてきた。便宜的に、『文学論』について記した事典項目によって代表させておく。まず、平成十二年、小倉脩三による解説

は次の通りである。

明治三六年九月から三八年六月まで、「英文学概説」と題して帝国大学文科大学英文科で行った講義の内容を、後に、受講生でもあった中川芳太郎に講義原稿を託して整理清書させ、さらに漱石自身の手で加筆訂正が加えられて、明治四〇年五月、大倉書店から刊行された。[5]

次いで遡り、平成四年、三好行雄による解説を引く。

明治三六年九月から明治三八年六月まで、「英文学概説」と題して帝国大学文科大学英文学科で行った講義の内容。最初の受講生中川芳太郎が自筆のノートをもとに、同級生の皆川正禧らのノートをもとに参照してまとめた草稿を漱石が校閲し、改訂補筆して完成した。[6]

前者の記事は後者を参照したうえで、それを否定したとみてよいだろう。両者の大きな相違点は中川が何を見て浄書稿を書き上げたかである。たとえば中川の教え子本多顕彰は「筆記者中川芳太郎は、（略）篤学の士であるけれども、『文学論』を自分の筆記をもとにして整理することをまかされるには、まだ学力が十分でなかつたであろう」[7]というが、その判断の根拠は示していない。中川存命中に会うことはあっても、漱石の話はお互いに出なかったというのだ。同様にこの二つの事典記事も、紙幅の制限もあってか根拠を示していない。漱石に関する汗牛充棟の著作物の中から典拠を推定するのは困難であるが、三好の記事については、小宮豊隆が昭和十一年に記した推測を断定に置き換えたものと考えられる。小宮はいう（傍点原文）。

漱石が是を自分で書かずに、他人に書かせたという事は、漱石第一の失敗であつた。（略）その七月にやつと大学を出ようとしてゐる、若い中川芳太郎にとつて、この仕事が到底背負ひ切れない重荷だつた事は、云ふまでもない事である。漱石は、『十八世紀英文学』（後に『文学評論』と改題）の講義こそ「蝿頭の細字」で原稿を作り、教場ではそれを朗読するだけの事にしてゐたのだから、是こそほんとに浄書するだけで事足りたのであるが、然し『文学論』の講義の草稿は、それほど体裁をなさず、従つてその「章節の区分目録の編纂其他一切の整理」の仕事は、単なる学識のみならず、頭の相当な内面的成熟を必要とするものであつた。中川芳太郎は、それに必要な材料や、自分のノートや、恐らく他の学生達のノートを、十分参酌して「一切の整理」に当つたには違ひない。（略）漱石は明治三十九年十月二十九日の手紙で、自分が「近刊の文学論に自序を認め」たから、「もしそれにてもよろしければ此次の附録に差し上げてもよろし」い旨を、当時読売新聞の記者をしてゐた、薄井秀一に報じてゐる。是は中川芳太郎の仕事が、十月中もしくは十一月の初めには出来上がる見込がついた為に、漱石はそれにざつと目を通した上で、すぐ印刷にとりかからせる積り――即ち漱石は、まだ中川芳太郎の仕事に目を通さない前に、この序文を書いたものに違ひないと思われる。然るに明治三十九年十一月十一日、漱石は高浜虚子に宛てて、「今日は早朝から文学論の原稿を見てゐます中川といふ人に依頼した処先生頗る名文をかくものだから少々降参して愚癡たら〳〵読んでゐます／今四

十枚ばかり見た処……」と書いた。漱石は恐らく、この日初めて中川芳太郎の原稿に眼を通して、是は困つた事になつたものだと、沁沁感じたのである。[8]

複数の間接的な情報源があっても不思議でない小宮の言であるから、全てを疑ってかかる必要もあるまいし、既に引いた森田草平の言とも大筋で矛盾しない。しかし、もとより推論に頼るほかない事柄の記述において、慎重にも「恐らく」を二度繰り返している点には留意したい。右引用のうち、「恐らく他の学生達のノートを、十分参酌して」という記述をより多く疑ってよいだろう。後に述べるとおり、実際に他の学生のノートと比較してみると、この推測はあまり当てにならないことがわかる。ところで三好の記事は『文学論』講義を三十六年九月からとしつつ、同年にすでに卒業（明治三十六年七月十一日）[9]していた皆川正禧（まさき）のノートに言及する論理矛盾を冒していることから察するに、四名の受講ノートをもとに編まれた『英文学形式論』（岩波書店、大正十三年）にまつわる事情を混同しているように思われる。漱石没後の出版になる『英文学形式論』の「はしがき」で編者皆川正禧は刊行経緯を述べて次のようにいう。

大正八年の暮郷里越後に起臥して居た自分に在京の野上臼川君から漱石先生の此講義の草稿がどうしても見当らないから、当時の聴講生たる自分共のノートより編成しては呉れまいかとの相談があつた。（略）ハーン先生の草稿無しの口授を筆記するに忙殺された学生には日本語の講義が解り過ぎてノートにするには反つて小面倒であつたであらう。（略）不審に堪へないのは先生の草稿が遂に見出されないことである。或は故意に破棄せられたとも想像される。さる場合には此抄録の発表は故先生の意志に背いた行動ともなる訳だが、（後略）

ハーンの授業スタイルと比較して草稿の存在をいう皆川の証言は信頼してよいと思われるが、当の授業に出席していない三学年下の臼川野上豊一郎が「講義の草稿」があるはずだと考えていたのにも理由がある。一高一年次に漱石による英語の授業を受け、帝大では「十八世紀英文学」講義を受けていた野上は当時を回想して次のようにいう。[10]

その頃の講義は、平生時間がないため、暑中休暇中に大半を作製されたやうである。草稿といふのはアヒ版の洋罫紙に、釘の頭で突いたやうな細字を、初から終まで隙間なく、行にも何んにも関係なしに並べた奴を、毎日一二枚づゝ持つて来られた。

この野上の証言は同級であった中勘助の回想でも裏付けられる。中勘助はいう。

先生の講義は十八世紀の英文学の評論とてむぺすとであつた。前者の最初の部分は評論をする時の態度といふやうなことであつた。私は筆記の必要を感じなかつたので、屢先生のすぐ前に席を占めながらつひぞぺんをとつたことがなかつた。先生は一寸それを気にするやうにみえた。（略）先生は合版の西洋紙の草稿を一枚づゝとりあげてみながら、ねつゝり〳〵と捏ちあげてゆく。調子が調子なり題材が題材なり、その上そのまた草稿が何でも一行の罫の中へ

小さな字で二行に書いてある様子で、それが一時間に一頁半か二頁位の割合（？）で進んでゆく。（略）先生は私が先生の引証する英文の中に出てくる言葉の綴りがわからないでつかへてゐると、必ず綴りをいつてくれた。[11]

野上は「十八世紀英文学」講義を受けた際に目にした「草稿」の記憶から遡って類推し、「形式論」の草稿を探したのであろう。なお「アヒ版の洋罫紙」とあるため、サイズからしても、留学期のいわゆる「文学論ノート」に主として使用されたすかしで罫が入っている紙[12]と区別できない。ともかく、皆川・野上・中の証言を繋いでみると、洋紙を手に日本語で講述、引用文は英語で読み上げる漱石の授業スタイルは一貫していたらしい。ただし、刊本『文学論』の成立過程という観点から問題となるのは、その洋紙に記された文章の粗密である。これについて次節で考察したい。

二　失われた「旧稿」について

皆川らがいう「草稿」、また小倉が想定する「講義原稿」とはいかなるものであったか。それは現在残されている「文学論ノート」のことか、森田・小宮が『文学論』講義に際しては作っていなかったとする〈読み上げ用原稿〉のことなのか。まずは『文学論』の「序」を見ておく。

第三学年にも此講義の稿を続くべかりしを種々の事情に遮ぎられて果たさず〔に「十八世紀英文学」を講じた：引用者注、以下同じ〕。已に講述せる部分の意に満たぬ所、足らざる所を書き直さんとして又果たさず、約二年の間其儘にて筐底に横はりしを、書肆の乞に応じて公けにする事となれり。

公けにする事を諾したる後も、身辺の事情に束縛せられて、わが旧稿を自身に浄写する暇さへ見出し得ず。已を得ず、友人中川芳太郎氏に章節の区分目録の編纂其他一切の整理を委託す。中川氏は此講義のある部分に主席したる上、博洽（はっこう）の学と篤実の質をかねたれば、余の知人中にて、かゝる事を処理するに於て尤も適当の人なり。

とある。「序」の後続箇所には「余に取っては是程の仕事を成就したる丈にて多大の満足なり」と校了したかのようにいうが、先述のとおり明治三十九年十月二十九日薄井秀一宛書簡に序文を認めた旨記述があり、初出掲載は同年十一月四日「読売新聞」である。小宮のいうとおり原稿加筆作業に本格的にとりかかる前に書かれたとみられる。つまり、執筆時点から未来を先取りして書くという意味での虚構性をもつことに注意したい。

他の箇所では英国人の「親切」に感謝し、自らを狂人扱いした者達に、果ては「神経衰弱と狂気」そのものにまで感謝するというレトリックを用いるこの序文において、とりわけ虚構が混じらざるを得ない出版経緯については、事実をありのままに説明するよりもレトリックを優先している可能性がある。ここでいう「旧稿」が、文字通り書き下された原稿、〈読み上げ用原稿〉を意味するとは限らない。「序」にはこうもある。

但十年の計画を二年につゞめたる為め（名は二年なるも出版の際に費やしたる時間を除いて実際に使用せるは二夏

なり）又純文学学生の所期に応ぜんとして、本来の組織を変じたる為め、今に至つて未成品にして、又未完品なるを免がれず。

つまり、一旦作り上げた「本来の組織」を変形させるために「二夏」、つまり帝国大学講義のなかった明治三十六年五月二十九日（金）～九月二十日（日）、明治三十七年七月一日（木）～九月十九日（月）のうちの幾らかをあてたものと解せる。前者は神経衰弱が悪化し鏡子と別居する期間であり、後者も神経衰弱を見かねた鏡子が虚子に頼み能を見に行かせるなどした期間である。同時期を題材にした小説『道草』（岩波書店、大正四年）では教員である健三が夏に妻を追い出して蝿頭の細字でノートを書き続けているが、この期間に作成された講義の〈読み上げ用原稿〉と断定できる資料は現存しない。

たとえば、「文学論ノート」中に「本講」、「愚見を述べて諸君の清聴を煩はさんとす。夫とても後の講義に便宜なる迄にとゞむる積」と講義を意識したものが混在している。[13] ただし、これらを受講生のノートと照らし合わせると、符合するのはごくわずかだ。果たしてこのような記述スタイルのノートが『文学論』講義全編を通じて作成されていたかは不明といわざるをえない。他方、「文学論ノート」には、授業で扱った（刊本に対応箇所が見いだせる）項目に取り消し線を引いた痕跡もある。これらも考え合わせれば、『文学論』講義は「文学論ノート」中から数枚を携行するか、抜き書きをするかして、講義をした可能性が高い。むろん〈読み上げ用原稿〉が全編にわたり存在し、皆川正禧がいうように「或は故意に破棄せられた」（前掲）可能性も否定できない。現存するのは取捨選択して保存されたノート群なのだと構えておく必要はあるだろう。

『文学論』講義に際し何か洋紙を持っていたことは間違いなく、使われなかった部分とおぼしき〈読み上げ用原稿〉も残っている。これ以上のことはさらなる資料の発見をまつまでまさしくミッシング・リンクと呼んでおくほかないが、少なくとも『文学論』第五編についてはもう少し別のことが言えるのではないかと筆者は考えている。そこで示唆を与えてくれるのが中川芳太郎筆草稿「第五編　集合Fの差異」である。これについては次節で詳論することとして、さらにいくつかの別のミッシング・リンクについても指摘しておきたい。

漱石は初版『文学論』について「校正者の不埒な為め誤字誤植雲の如く癇癪が起つて仕様がない。出来れば印刷した千部を庭へ積んで火をつけて焚いて仕舞いたい」[14]としたから、漱石による校正刷りへの加除訂正があったとは考えがたい。しかし、『漱石全集』（十四巻第二版、岩波書店、平成十五年）注解で亀井俊介が疑問を呈しているとおり、（5）原稿と（6―1）刊本初版では字句が異なる箇所がある（たとえば「準対置法」→「仮対法」）。校正刷りがなくとも、何らかの意思伝達が行われた可能性があるが未詳である。

このように資料と資料との間にミッシング・リンクが存在し、『文学論』の成立過程は依然として推論によるしかない部分が少なくない。しかし、資料批判は着実に進みつつある。たとえば、金子健二『人間漱石』（いちろ社、昭和二十三年十一月）、荒正人・小田切秀雄『増補改訂漱石研究年表』（集英社、

昭和五十九年）、村岡勇編『漱石資料――文学論ノート』（岩波書店、昭和五十六年）について、特に『文学論』に関係するかぎりでは再検討すべき点が指摘されている。

村岡勇編『漱石資料――文学論ノート』は、複数ページを糊付けしたノートの採録に際し、ページ進行方向が逆転しており、漱石が書き継いでいった順にノートを読めないという深刻な不備、その他断りなく採録を省略した箇所があるなどの問題点が小倉脩三によって指摘されていた。[15] また、『文学論』の序にいう「蝿頭の細字にて五六寸の高さに達した」「留学中に余が蒐めたるノート」と目された中に、帰国後のものがあることが岡三郎らの調査で明らかにされた。『漱石全集』二十一巻（岩波書店、平成十五年）後記によれば次のとおりである。

（1）帰国後に第一高等学校の附属図書館から借り出して読んだ本のノートが認められる（岡三郎「東京大学教養学部図書館に発見された漱石の書き入れ本」、同著『夏目漱石研究』第一巻（一九八一年）所収、参照）。

（2）明治三十九年四月二十八日付の購入書籍請求書の裏に記されたノート（Ⅳ―3）が存在する。[16]

（3）ノートⅠ―4のように、読者（受講者）を明らかに意識した、講義の準備のためと思われるノートが存在する。

金子健二『人間漱石』は、漱石の元教え子が当時の日記を引用してその実像を伝えた記録として、また受講者であり同じ英文学者でもある著者による『文学論』批判として長らく重視されてきた。その後、孫の金子三郎氏によって、健二の受講ノートと日記とが翻刻・編集され少部数出版された。以下の通りである。

・『川渡り餅やい餅やい――金子健二日記抄――』（平成十年十二月、奥付なし・上中下三巻。「記録魔」とでもいうべき健二の生涯に渡る日記から抄録したもの。以下『金子日記抄』と呼ぶ）

・『記録　東京帝大一学生のノート』（リーブ企画出版社、平成十四年三月。小泉八雲の講義と、漱石の〈General Conception of Literature〉講義、両者に関わる日記の抜き書きを収める。以下『金子ノート』と呼ぶ）

伊狩章は『金子日記抄』を取りあげて、日記体からなる『人間漱石』が日記実物とは「かなりの食い違いのあることに気付かされた」としている。[17] これを承けて詳細な比較を行った鈴木良昭は次のようにいう。

〔『人間漱石』は：引用者注〕形式・体裁は「日記」だが、「事実の記録」を旨とする日記と見るわけにはいかない。（略）事実の記録である『日記』〔『金子健二日記抄』の対応箇所本文：引用者注〕の何倍もの分量の加筆がなされ、事実と異なる記載があったりする。（略）日記ではなく日記文学のようなもの、と解すればいいのだ。（略）『人間漱石』が掲げる日記を「日記」と解して漱石の調査研究等の資料に用いることには余程慎重でなければならない。少なくとも『日記』との照合を経ずに用いることは避けるべきである。[18]

こうした調査をもとに、鈴木は荒正人・小田切秀雄『増補改

訂漱石研究年表』における漱石の授業時間割の誤りを指摘し、『金子日記抄』等をもとに漱石の時間割を再現している。時間割については、鈴木が参照している通り、東北大学附属図書館漱石文庫に所蔵される断片「東京大学講師時代の時間割」から裏付けられる（なお、時間割の裏には講義計画と思われるメモがある）。時間割では、月曜一〇時～一二時「シェクスピア講義（King Lear）」。火曜九時～一〇時同講義、続いて一〇時～一一時「文学論」。木曜九時～一一時「文学論」。このように一日二時間を週三日、一般講義と専門講義を半分ずつ行っていたのである。これがいつの時間割であるかは、『リア王』講義が月曜に二時間続きになっていることがヒントになる。『リア王』講義期間（明治三十七年二月十八日～十一月二十九日）中の出席時刻や講義内容についての記述を『金子日記抄』から拾うと、明治三十七年六月の年度納めまでの月曜日は『文学論』講義が二時間続きとわかる。夏休み明けの明治三十七年九月二十日（火）開始の新年度では、月曜日が二時間続きの『リア王』講義に替わる。同十一月二十九日に『リア王』を終え、『ハムレット』に移る。

つまり、この時間割が当てはまるのは明治三十七年九月から十一月末である。このことから、裏に書かれたメモもこの時期に前後するものと推定できる。この明治三十七年七月、漱石は坂本四方太に愚痴をこぼし、俳体詩に「来年の講義を一人苦しがり／パナマの帽を鳥渡うらやむ」と詠んだという。[19] おそらく夏休み中に考えた新年度の構成を、既に講じた項目（「第四編第二章　投入語法」まで）とこれから講じる項目（「第四編第三章　自己と隔離せる聯想」から）とにわけて一覧化したメモなのであろう。この推論を裏付けるのは、『金子ノート』（三九二頁）に「（二年級終り）」「（前学年の続き）」とある境目が、刊本「第四編第二章　投入語法」の最終盤（二八〇頁）に相当すること、また一学年上の森巻吉の受講ノート（東京大学駒場博物館蔵）が同じ箇所で終わっていることである。なおこのメモには「第五編　集合Fの差異」にあたる項目は書き記されていない。「集合的F」が講じられるのは年度はじめの明治三十七年九月から数えて半年以上先となる。

三　中川芳太郎筆草稿「第五編　集合Fの差異」

『文学論』の成立過程について中川芳太郎筆草稿はいくつかの興味深い示唆を与えてくれる。『文学論』第五編にあたる項目は前述のとおり、講義計画と思われる時間割裏のメモに記されていない。おそらくは明治三十七年九月からの学期中に作られたか、[20]同年年末に作られたかした草稿によって講義が行われたのだろう。『文学論』第五編にあたる講義の初日は『金子日記抄』によれば明治三十八年四月二十日木曜日であり、次のように記されている。

午後九時より夏目講師の文学論に出席す。今日より講義の題目改まり文学的要素の一たるコグニチーブ・エレメントの各時代各個人に由て異ることを述べらる。観察点の奇警なるは此の講師の特色なり。来六月迄に此の講義を完結する予定なりと言へば余等は最も幸福の位置に立てりと言

はざるべからず。（三年引き続いて同一の問題にて研究せられしを以てなり）。

「文学論序」にいう、三年連続講義のつもりが二年としたという決断は、事実上このとき表明されたのである（金子がここでいう「三年」は一箇月に過ぎぬ「形式論」を一年とした数え方）。この「第五編」については、『金子ノート』、「中川草稿」、「漱石原稿」、刊本『文学論』という比較が可能である。

まず『金子ノート』については、「第五編」にあたる講義時期の日記が『金子日記抄』に網羅されているわけでないため、欠席によって『金子ノート』に穴が開いていないかが確定されないが、おそらく完全なものである（金子健二のノート及び日記の原本にあたることはご遺族の意向により見合わせた）。なお管見のかぎり、第五編を記録する学生受講ノートは『金子ノート』のみである。

次に「中川草稿」については、既に述べたとおり、「第五編集合Fの差異」と始まり、末尾に「編を閉づ」とあることから刊行のための浄書稿としてよいだろう。

最後に「第五編」の「漱石原稿」について述べる。本文は原稿用紙に罫を無視して朱筆で書かれている。同筆による加除訂正も加えられているが、多くは細かな字句の推敲である。今回の調査範囲では取りあげるべき箇所がとくに見つからないため、現行『漱石全集』本文を「刊本」として代表させて用いることとする。

そこで『金子ノート』、「中川草稿」、刊本『文学論』の三者を照合したい。これにより、中川が序文でいう「中川草稿」の問題点「整理の際省略に過ぎ論旨の貫徹を欠く節多かりし」ことの実態が明らかになる。そのうえで、前節で留保した中川の浄書原稿作成に際し〈読み上げ用原稿〉がもとになったのか、中川自身の受講ノートがもとになったのか等の問題について示唆を得たい。

しかしながら、紙幅の関係で『金子ノート』、「中川草稿」、刊本『文学論』三者の比較結果をすべてここに掲げることはできない。そこでいささか不十分ではあるが、特徴的な箇所を選んで【資料】として末尾に掲載した。

現物をご覧になれば一目瞭然であるが、三者中「中川草稿」の文章量の少なさは際だっている。ときには複数項目に分けて説明したうちのいくつかの項が丸ごと抜け落ちていることもある【資料】中、四四六・一、四四六・一、四七九・一〇）。これらの箇所では、金子健二の受講ノートのほうがよほど刊本『文学論』の本文に近い。

さて、前節で保留とした失われた「旧稿」についてであるが、これは存在していたとしても、少なくとも『文学論』第五編にあたる講義箇所については「文学論ノート」に近いメモであったと筆者は考えている。というのも、〈読み上げ用原稿〉といえるほど文章化されたものがもしあったとして、それをもとに中川が浄書を行ったとするならば、説明が付かないほどに「中川草稿」は論述の目が粗すぎるからである。

たとえば、【資料】の「四一九・一〇」にあるとおり、漱石はここで第五編の中心概念である「集合的F」の「F」の定義を改めて確認している。とくに断り無く「F」というときは

（F＋f）を意味すると。だとすれば「集合的F」の推移とは「集合的（F＋f）」の推移を意味するし、「天才的F」は「天才的（F＋f）」を意味することになる。こうした重要な断り書きは『金子ノート』対応箇所に徴して講義でも言及されたとわかるが、「中川草稿」からは抜け落ちている。これでは第五編の論理展開に誤読の可能性を生じてしまう。中川のいう「整理の際省略に過ぎ論旨の貫徹を欠く節」とはこうした小さな、しかし重大な省略の積み重ねによるものであろう（「反動（リアクション）」概念もわかりにくくなっている）。

『文学論』は前半部こそ同一趣旨を説明するために文例を列挙するところがあり、中川の判断でも具体例を削ることは容易かったであろう。しかし後半部に至り論述の肌理が細かくなってきたところで、論点そのものを損なうほどに削ることを独断であえてしたとは考えがたい。また多忙かつ精神的に不安定な時期であったとはいえ、中川芳太郎の知性をあまりに低く見積もることは得策でない。

むしろ問題は、中川が授業でとったノートにあったのではないだろうか。中川の受講ノートのうち、現存するのは刊本『文学論』の冒頭から、第一編第二章「（d）運動」の途中（四八頁）までである。これらの箇所は『金子ノート』や森巻吉の受講ノート（東京大学駒場博物館蔵）に比しても遜色のない詳しい筆記が行われている。しかし、二年間のうちに中川のノート・テイキングに変化があったとしたらどうだろうか。

金子健二は日記からも窺えるとおり几帳面な人物で、授業をほぼ逐語的に書き取ろうとし（もちろん用例を省いている箇所はある）、図書館で引用文を確かめて訂正し、ノートを完成させようとしたらしい（ただし、刊本『金子ノート』はその凡例にあるとおり金子三郎氏があたう限り典拠にあたり引用文を補訂しており、金子健二の筆記そのものの質を必ずしも反映していないことに留意）。他方で、皆川の証言によれば着任当初の学生達の反応は筆記拒否としても現れていたらしい。また小泉八雲騒動を別にしても、すでに引いた中勘助のように興味の無い部分は筆記を行わず、気が向いたら筆記する学生もいた。その点、三高の首席といわれる中川芳太郎は、理解が早く、すべてを逐語的に書き取る必要を感じなくなっていったかもしれない。受講当時は記憶も新しいから粗めの記述でも困らなかったが、二年近く経って本にすると言われてみると、論旨がたどれなくなってしまった――おまけに漱石によるメモは頼りにならない――中川のみまわれたトラブルとは大筋でこのようなものだったのではないか。漱石が授業で用いた「旧稿」が〈読み上げ用原稿〉の形であれば、中川はより質の高い原稿を書けていたであろう。「中川草稿」に見切りをつけた後、漱石は自分でないと読む順番も分からないような断片的なメモをつなぎ合わせて、講義を復元していったのではなかっただろうか。なおも推測の域を出ないが、諸賢の批正を仰ぎたい。

最後に、刊本五一二頁に相当するあたりで『金子ノート』が「学年終り　三十八年六月八日」と終わっているのに対し、「中川草稿」はさらに続きがあることを指摘しておく。その続いている内容は、暗示論と成功論である。刊本はこの順序を逆転させ、成功論を第六章の末尾に、暗示論を第七章に補遺とし

て収めている（他にも刊本で順序が変更された箇所があるがここでは触れない）。金子が「学年終り」としたこの六月について、小宮豊隆も指摘する通り、『文学評論』「序論」には「然し此六月に学年が了へると此九月から急に新しい講義をしなければならん」「兎に角夏休が済んで直ぐ始めると云ふ早急な場合に碌な事が書ける者ではない」という言葉が見える。明治三十八年六月の授業日数が数日余って、次年度用の序論部分を講じたものと思われる。このことと『金子ノート』に「学年終り」とあり、「中川草稿」にはその続きがあることとはどう整合するのだろうか。

ここで学年の差が授業の出席に関係した可能性を考えたい。金子はその七月付で卒業する第三学年であるから、第一・二学年生と扱いが違ったのではないか。中川芳太郎は当時第二学年である。情報の行き違いか、金子の勘違いか、漱石が発言を翻して補遺として講義を補ったかは定かでないが、残りの日数に「中川草稿」のみに記された『文学論』講義の最終部と「十八世紀英文学」の序論とが講じられた、とすればつじつまがあう。

今回の調査では、第五編について『金子ノート』と刊本『文学論』の記述とは根本的な見直しというほどには変わっていないことが確かめられた。もちろん増補はあるし、説明のバリエーションが増えてはいる（「天才的F」についての説明方法など）。しかし、「中川草稿」を比較に加えると、そうした些細な違いは吹き飛んでしまう。両者に比べて、「中川草稿」は格段に痩せ細った本文をもつからだ。とくに講義で項目分けして述べられたことを削ってしまう辺りは、中川の独断による〈編集行為〉とは考えがたい。受講時に理解したが書き留めなかったことが、「中川草稿」を説明不足なものにしたと筆者は考える。

とするならば、「整理の際省略に過ぎ論旨の貫徹欠く節」の多い「中川草稿」を前にして、結果的には『金子ノート』に比しても遜色ない本文を書き下ろすという漱石の作業は、記録の〈再読〉でなく、〈校正〉でもなくて、自身の失われた講義の〈復元・再構築〉の作業であったといってよい。「未成市街の廃墟」（「文学論序」）という言葉は、図らずも自らの改稿作業の道行きを予示していたといえるだろう。また本稿がしたように、〈他筆による関連資料〉との比較を通して、受講生達の記録する『文学論』講義には見られない、刊本『文学論』固有というべき言説を見出すことができる。それを踏まえて、留学以来の一連の理論的生成過程としての〈文学論〉総体を読み直す作業が必要となるだろう。

注

（1）末延芳晴『夏目金之助、ロンドンに狂せり』（青土社、平成十六年）、第十八章。

（2）森田草平『夏目漱石（二）』（講談社学術文庫、昭和五十四年）、一〇三頁、三一三―一四頁。初刊は『続夏目漱石』（甲鳥書林、昭和十八年）

（3）野間真綱「文学論前後」（『漱石全集』別巻、岩波書店、平成十六年）

（4）森田、三一四―一五頁。

（5）小倉脩三「文学論」（平岡敏夫他編『夏目漱石事典』勉誠出版、平成十二年）

(6) 三好行雄「〈漱石作品事典〉文学論」(同編『夏目漱石事典』学燈社、平成四年)
(7) 本多顕彰「解説」(『夏目漱石全集』五、創芸社、昭和三十年四月)
(8) 小宮豊隆「文学論」(『漱石の藝術』岩波書店、昭和十七年。初出は決定版『漱石全集』の解説で、記事末尾に昭和十一年四月十九日とある)、また同「文学評論」も参照。
(9) 近藤哲『夏目漱石と門下生・皆川正禧』(歴史春秋社、平成二十一年)。
(10) 野上豊一郎「大学講師時代の夏目先生」(『漱石全集』別巻、前掲)。
(11) 中勘助「漱石先生と私」(『漱石全集』別巻、前掲)。
(12) 湯本智子「漱石文庫の整理にたずさわって(3)自筆資料に見られる用紙と未翻訳断片について」(『木這子』二一・三、東北大学附属図書館、平成八年十二月三十一日)。
(13) 「〔I—4 Lifeに就て〕」、「〔III—1 Artに就て〕」(『漱石全集』二一、岩波書店、平成十五年)およびその脚注を参照。
(14) 菅虎雄宛書簡、明治四十年五月三十日。
(15) 小倉脩三「東北大学所蔵『文学論』関係資料について」(『漱石研究』三、翰林書房、平成六年)。
(16) その他、「1903」「1904」という年号の透かしのある用紙など、用紙から帰国後であると確定できるものが報告されている。湯本智子「漱石文庫の整理にたずさわって(3)自筆資料に見られる用紙と未翻訳断片について」(『木這子』二一・三、東北大学附属図書館、平成八年十二月三十一日)。
(17) 伊狩章『鷗外・漱石と近代の文苑——付整・譲・八一等の回想』(翰林書房、平成十三年)。
(18) 鈴木良昭『文科大学講師夏目金之助』(冬至書房、平成二十二年)。
(19) 高浜虚子「俳話(六)」(「ホトトギス」明治三十七年八月)。
(20) 明治三十六年夏の勉強がここに関わらないわけではない。岡三郎は第一高等学校図書館旧蔵タッカーマン『イギリス小説史』(Bayard Tuckerman: *A History of English Prose Fiction*, Newyork & London, 1899.)への書き入れが漱石によると立証したうえで、「明治三十六年夏の時点で漱石がこのような文献に出会ったことで、のちの『文学論』の第五編の集合的Fについての〔英文学史的〕叙述の見通しがいっそう確実になったものとみることができよう」とする。岡三郎『夏目漱石研究 第一巻 意識と材源』(国文社、昭和五十六年)、八—九章参照。

※漱石テクストの引用は平成十四年版、第二次刊行『漱石全集』(岩波書店)によった。金子健二受講ノートは金子三郎編『記録 東京帝大一学生のノート』(リーブ企画出版社、平成十四年三月)によった。『文学論』原稿、中川芳太郎筆「受講ノート」、中川芳太郎筆草稿「第五編 集合Fの差異」はいずれも県立神奈川近代文学館蔵。翻刻に際し合略字は「して」「こと」のようにすべて開いた。以上のテクストについて適宜、カタカナ文をひらがな文に改め、句読点を補い、かなに濁点を附す等、表記を改めて使用したことをお断りする。

※調査に際し、県立神奈川近代文学館資料課長北村陽子様に大変お世話になりました。あつく御礼申し上げます。

【資料】 刊本『文学論』第五編本文と他筆による関連資料の比較（抄）

※本表は抄録であり、異同箇所を網羅していない。引用文中の傍線、及び①②③……という番号は対応箇所指示のため引用者が附した。〔　〕は引用者注記。対応箇所がない場合は×を記した。対応箇所が構成上移動している場合は、〔　〕内に対応頁数を記した。

刊本（頁・行）	刊本『文学論』本文（第五編執筆は明治四十年二・三月頃であると推定する）	中川芳太郎筆「集合Fの差異」（明治三十九年後半？）	金子健二受講ノート（第五編は明治三十八年四月二十日から六月八日に筆記されたと日記から特定可能）
四一九	文学的Fは必ず（F＋f）の公式を具ふとの結果を示したり。然れども（F＋f）はFの一種なるを以て、単にFと云ふも、fを伴はずと附記せざる限りは文学的Fを含むと見做すを妨げざるに似たり。	×	〔四四八〕文学のgeneral formはF＋fとなるなり。故にFの差異と云ふときは文学的elementの差異と見て可なり。〔四五〇〕今迄述べしことは一般に干するFなれどもこゝにて云はんとするは特に文学上のFと見るを便とす。一般の場合にてはemotion (f) が加はらず文学上にて云ふときは此Fにfが加はるものとす
四一三 六	①生存上に必要なる模倣性 ②第二義の模倣とは必要ならざるに、好奇の余、他を模倣するを云ふ。 ③自然より命ぜられたる模倣なり。自己の意志以上のあるものに余儀なくせられたる模倣なりと。	×〔刊本のような「模倣」概念の多面的な整理は中川稿にはない〕	〔刊本のように項目化されていないが、対応する記述を示す。四五〇〕 ①吾人は模倣せざれば生存するを得ず。 ②模倣する必要なきこと迄も模倣するは人情なり ③自ら模倣せざると思へる人も能く反省すれば矢張り模倣しつゝあるなり
四一四 十	波動は生命の続く限り、社会の存する限り曲線を描いて停止する所なし。此故にFは必ず推移を意味す。（活動なきFを想像するとき、吾人は記憶の観念を離れざるを得ず。只一Fにとゞまつて左右を顧み前後を連結する能はざるを以て、吾人とFとは合して一となる。而して其一たる事をすら認識する能はず。） 〔四四四に禅の例あり。曰く、「禅に頓悟なるものあり、其説をきくに自から悟に近きつゝ、自から知らず、多年修養の功、一朝機縁の熟するに逢ふて、俄然として乾坤を新たにすと。此種の現象は禅に限るにあらず。吾人の日常生活に於て多く遭遇し得るの状態ならざるべからず。（吾人はとくに禅	×	〔Geniusのconsciousnessの説明の中に対比として、四五二〕若し文字通りにF即ちconsciousnessが移らずとせば如何になるべきか。一種異なりたる結果を生ずべし。即、我と云ふconsciousnessが消えて物と我とがidenticalになるべし。（略）波（F）の留るに二つの方法あり。一はconsciousnessの内容が零となる場合、恐くは死と云ふ情態が之なるべし。他の一つはFの内容（primary memory）が一定不変なるを云ふ。此場合にはmemoryなること全く止む。（略）自己の有する過去なる感は滅却すべし。同時に自己が物より独立して存在せりと云ふ感もなくなるべし。故に此る場合にはFは我にして我はFなりと感ずるに至る。無我の状体は是なり。（略）天才

	に於て此特別の権利を附与するの理由を認めざるが故に）。只変化の至る迄内に昂騰しつゝある新意識を自覚する能はざるが故に此種の推移に逢へば之を突然と云ふ。」	×	のFが移らぬと云ふは此る意味の物にあらず。此る種類のものは禅僧の純一無雑の意味なり。
四三五 一四	（諸君若しFの発育する過程を知らんと欲せばBaldwin（書名略）又実例に就て天才の風貌を窺はんと欲するものはLombroso（書名略）Gustave Le Bonの*The Psychology of Socialism*は通俗にして学説の深奥なるものなしと雖も集合せる人心の活動状態を知るに便宜あるを以て通読するを可とす）。	×	此の三つのconsciousnessに付て研究するときは妙味あり。参考にすべきは// Baldwin（書名略）// Gustave Le Bon（書名略）// Lombroso（書名略）
四四六 一	（一）吾人意識の推移は暗示法に因つて支配せらる。//（二）吾人意識の推移は普通の場合に於て数多のⒻの競争を経。（ある時はFとF′の両者間にも競争あるべし）。//（三）此競争は自然なり。又必要なり。此競争暗示なき時は//（四）吾人は習慣的に又約束的に意識の内容と順序を繰り返すに過ぎず。//（五）推移は順次にして急劇ならざるを便宜とす。（反動は表面上急劇にして実は順次なるものなり）。//（六）推移の急劇なる場合は前後両状態の間に対照あるを可とす。（対照以外に之と同等なる又は同等以上の刺激あるときは此限りにあらず）	（一）暗示はあり得べしと云ふよりも寧ろ必然なりと云ふ方適当なり、（二）其暗示は其働き掛けむとするFと類似の度合大なるに比例して其効力を増進するものとす。（略）突飛の暗示は押し潰されて遂に自滅するに終ること普通なりとす。	（I）Suggestionはpossibleなるのみならず必然なり。（II）Suggestionなき場合はF（consciousness）はAcquired orderをrepeatす。（III）Suggestionはpreceding consciousnessに縁近きときに成功す。即ちFとF′とが非常に近き時に成功す。（略）突飛なるsuggestionは功少し。此一事が文学史研究上最も注目すべき問題なり。（IV）多くのsuggestionは互にstruggleにて発顕せんと力めつゝあり。又preceding Fとnew suggestionとが互にstruggleすることもあり。
四七九 十	吾人は次にThomsonの*The Seasons*をとつて此原則の意義を二三の方面より証明するを得べしと信ず。 ①吐属の主題は自然に存す。（略）英国詩人が天地山水に対する真情は（略）其暗示の流を遠き半世に遡れば、其淵源する所却つてこの辺に存す。 ②多少の超自然的材料を含む。幽玄の境致に怪異を髣髴せしむるのみならず、明らさまに幽霊の文字を使用せる箇所一	× 〔Thomson "*The Seasons*" についての言及なし〕	次にThomsonをとりて検するも矢張り同一なり。 ①春夏秋冬の四季を分けてnatureなるelementsに重きを置いて歌ひしものは氏の"*The Seasons*"なり。（略）其suggestionの遠き所は却てThomsonの詩の中にあるなり。 ②supernaturalの凄味あるelementsあり。幽邃の景色、幽霊等あり。（略）Coleridgeの如きrefined, delicate, supernaturalに至りしなり。

二にして足らず。（略）Coleridge の擅場（略）其暗示の糸を繰りて逆しまに十八世紀に入るとき、吾人は吾人の通路に於て *The Seasons* の横はるを認めて

③沈鬱なる所あり、想に於て悲傷する所なきにあらず。（略）Thomson は実に初期の暗示を後人に与へたるを証すべし。

④sentimental なる小話を挿む事多し。是彼が Sterne 及び Goldsmith と共有する要素にして、一事天下に流行せる Wertherism の先駆と見るを得べきに似たり。

⑥同時代の趣味を帯べるは吾人が研究上尤も興致ある事実なり。（略）当時に流行せる風潮と、後代に発達せる傾向とが同一所に居を卜して相隣る

③melancholy tone を帯ぶ。（略）大きに論ずるときは矢張 suggestion が gradual なることを証するに足るなり。

④詩の中には sentimental の所あり。之は Sterne 或は Goldsmith の有する element にして一時流行せし Wertherism の先きがけと見ても可なり。

⑤又 slavery をのゝしり禽獣をのゝしれる所は後の Cowper のさきがけなり

⑥後にあらはれ来る物に suggestion を与へ又同時代のことをあらはせり。（略）当時のこと及後世に起り来ることを side by side にあらはせるもの